

# 供物を通して見たバラモン教のパンテオン

——『家庭経 (Grihya-Sutras)』を中心に——

金 基 淑

## I. はじめに

本稿は、バラモン教（ヴェーダと祭式を重んじるヒンドゥー教の前身）における家庭儀礼（浄法・呪法を含む）・供物（種類・供え方）・献供対象の三者間の関係の考察を通して、超自然的存在に対する当時の認識を知ることがを目的とする。具体的には、

- ①神々の性格や形相が供物に反映されているかどうか、
- ②今日のヒンドゥー教にみられるような超自然的存在間の序列が存在するかどうか

の二点を中心にみていきたい。

供物は、超自然的存在と帰依者とのコミュニケーションの手段であると同時に、超自然的存在に対する帰依者の考え方を示すものである。

今日のヒンドゥー教の供物は神、場所、時期、献供者などによって多種多様であるが、供物をめぐりいくつかの特徴が見いだせることはすでに指摘されている (Ferro-Luzzi 1977a,b)。南インド4州の供物を調べたフェルロ＝ルッチは、以下の4点をあげている (Ferro-Luzzi 1977a: 554)。

- ①神々は食物の浄性に関心がある。
- ②食物は浄または不浄（な状態）になりうる。
- ③ヒンドゥー教の神々と食物はそれぞれ特性をもっており、神々は自らの性格と一致した食物を好むと思われる。
- ④神々の性格は食物によって影響を受け

る。

南インドの各家庭では、パーヤサム (*payasam*) という牛乳入りの甘い粥がどの儀礼にも用いられ、典型的供物となっている<sup>(1)</sup>。ベンガル地方でも同じ物をパエシ (*payes*) と呼び、供物によく用いる。水のみか、または発酵させるために一晩おいた材料で料理したものは不浄な状態に陥りやすいので、供物としてふさわしくないとされる。たとえば南インドの代表的なスナックであるイードゥリ（米と黒豆の蒸しパン）やドーサ（類似の材料で作ったパンケーキ）は、長時間発酵させた粉で作るためプージャー（祭りや礼拝）には用いられない (*ibid*: 543)。さらに、浄性の高い乳製品でも、ギーより牛乳の入ったもののほうが浄度が高いとされる。果物や豆類などの性格は形や色で類推される場合が多いようである。たとえば、供物として多く用いられるココナッツは、人間の頭の形に似ていることから儀礼において頭部を象徴し、動物供犠の代わりとして割られ供えられる (*ibid*: 552)。黒豆や黒ゴマはその黒い色のため、前者は魔王ラーヴァナを表し (*ibid*: 549)、後者は死者の食べ物 (*ibid*: 551) とされる。逆に緑豆やライム（緑色）は、熱を下げ神の怒りを鎮める効果がある (*ibid*: 550)。ライムの酸味は悪霊を追い払うとも考えられている。神々の性格や姿と符合した供物としては、羊飼いだったクリシュナ（ヴィシュヌの化身）へのバターや牛乳、ガネーシへの膨らました菓子（大きいお腹を象徴）、蛇への卵と

牛乳（脱皮して再生すると信じられているため）、鬼霊への肉と酒などがある。むろん、すべての神が特定の供物と結びついていてわけではなく、もっとも篤い信仰を集めているシヴァとヴィシュヌにはその性格を表す決まった供物はない。また、供物はその地域の産物とも密接なかかわりをもっており、同じ神でも地域や司祭の出身地によって供えられるものが異なったりもする。

それではヒンドゥー教の前身であるバラモン教において、供物の性格や神々との関係はどうなっているのであろうか。本稿では、『家庭経（*Grihya-sutra*：以下GSと記す）』<sup>(2)</sup>を資料とし、そこに取りあげられた家庭儀礼と供物との関係を考察していきたい。

## II. 『家庭経』について

ヴェーダの六つの補助学書<sup>(3)</sup>の一つであるカルパ・スートラ（*Kalpa-sutra*：祭事経）には、GSを含めて四種がある。残りの三つは、シュラウタ・スートラ（*Surauta-sutra*：天啓経）、ダルマ・スートラ（*Dharma-sutra*：律法経）、シュルヴァ・スートラ（*Sulva-sutra*：祭壇経）である。ヴェーダ諸学派の多くはそれぞれ、祭事（祭場、祭壇、祭火など）やヴァルナ（四種姓）の権利・義務・生活法に関する規定書のスートラをもっており、これらは古代バラモン教の祭祀や諸儀礼を知る上で貴重な資料となっている。

GSは紀元前600年～紀元前200年ころに作成されたバラモン教時代の文献である。他のスートラ文献と同様に、GSの正確な成立年代は不明である。本文の中に年代を示す記述がないため、他の文献との文法、音韻、文体、内容などの対照研究を行いその成立期を推定するようである。そのため、その成立年代は紀元前6、7世紀から紀元前2世紀、紀元前9世紀から紀元前6世紀、紀元前5世紀から紀元前3世紀というふう

にいくつかの説があり、サンスクリット文献の年代の確定の難しさを示している。幸いに作成者とその出身地、諸学派の発祥地と普及地域などを、注釈、碑文、写本の出所、ブラーマンの伝統などによって知ることができ、それぞれの儀礼が行われた地域はある程度特定できる。

すでに述べたように、ヴェーダの諸学派は各々のスートラ全集をもっているため、学派ごとに違うGSがあり、現在約17種が伝わっている。GSは文字通り、再生族の家長夫妻によって行われる家庭内の祭祀および諸儀礼を幅広く集めた家庭儀礼綱要書である。その編集者は各ヴェーダ学派の著名な師（*acarya*）となっているが、中にはその後継者もいるという。権威ある文献の起源を著名な師あるいは学派の長に求めることはインドではよくあることである。本稿の資料となるGSは17種のうち、入手可能な英訳版のシャーンカーヤナ（*Sankhayanana*）GS、アーシュヴァラーヤナ（*Asvalayana*）GS、パーラスカラ（*Paraskara*）GS、カーディラ（*Khadila*）GS、ゴビラ（*Gobhila*）GS、ヒラニャケーシン（*Hiranyakesin*）GS、アーパスタンバ（*Apastamba*）GSの7種である。シャーンカーヤナGSは、リグ・ヴェーダとカウシータカ・ブラーフマナ（*Kausitaka-Brahmana*）に基づいており、全部で6節（*adhaya*）96項（*khandas*）からなっている。この後継者たちは主にインド西北部のグジャラート州とラージャスタン州を本拠地としている。アーシュヴァラーヤナGSはリグ・ヴェーダ派に属しており、この学派は最初ヒマラヤとヴィンドゥヤスの間の地域を中心としたが、後にインド全域に広まった。内容は4節55項から構成されている。パーラスカラGSは白ヤジュール・ヴェーダに属し、カーティアヤナ・シュラウタ・スートラ（*Katyayana-Surauta-sutra*）の付録で、3節52項からなっている。カーティアヤナはインドの東北部で暮らしていたといわれている。カ

ーディラGSはサーマ・ヴェーダに属する4つのGSのうちの一つであり、ゴービラGSを要約したものなので、両者の内容はほとんど同じである。4節19項からなり、南インドの家庭儀礼の代表的なマニュアルとされる。ゴービラGSはサーマ・ヴェーダに属し、4章39項で構成されている。ヒラニャケーシンGSはアーパスタンバGSとともに黒ヤジュル・ヴェーダのタイッティリーヤ派に属するため、両者はもっとも密接な関係にある。主な違いは、前者が他のGSと同様に諸儀礼とマントラ（真言）を一緒に記述しているのに対して、後者はマントラがない点である。構成は前者が比較的短い2節16項からなっており、後者は全部で8節23項である。

ヴェーダやバラモン教の文献は、ブラーマンの理想とするブラーマン中心の社会秩序や大規模な祭式に関するものが多く、必ずしも当時の生活を反映しているわけではないともいわれている。しかし、GSの家庭儀礼にみるように、多様な儀礼や浄法・呪法が完全に現実から離れたものではなかったであろうし、GSが創作ではなく、他の文献からの借用部分が多いとはいえ、諸儀礼を編集したものであるという点からも現実を反映したものであると思われる。また、GSの家庭儀礼が再生族中心のものであるとしても、バラモン教の超自然的存在に対する認識を知るうえで貴重な資料である。

### III. バラモン教における神々

この章では、次章において神々と供物との関係を考察する前に、GSに登場する神々の性格について簡単に紹介しておきたい。

①インドラ (*Indra*) : 大雨をもたらす雷霆神であるが、後に空界の魔類やアーリヤ人の仇敵を退治し、英雄神となった。全身褐色で神酒ソーマを好み、神妃インドラニーをもつ。ブラーフマナと叙事詩

時代にはなお大神の位置を保つが、プラーナに至ってその神位は次第に低下していく。今日のヒンドゥー教では名だけが残し、信仰の対象から外されている。

②アグニ (*Agni*) : 火、火神、火祭り、祭式用の鳥形祭壇をさす。ソーマとともにヴェーダ時代からアーリヤ人の宗教において重要な位置を占めていた。『リグ・ヴェーダ』の総1,028節の讃歌のうち、アグニに捧げられたものは約200ほどあり、これはインドラの次に多いものである。そこに描かれたアグニ像は燃えたつ髪と髭、鋭い歯と数個の舌、割れた鼻の持ち主で、敵と悪霊の退治者である。ギーを好む「勝利の力」の息子でもある。また永遠に若く、故に長寿を与え、点火用の木片、天（稲妻、太陽）、地（草樹）、水から生まれるものとされる。天から落ちてきた雷によって燃え上がる野原を見、強風によって激しくこすりあった木の葉から火が起きるのをみたのであろう。また太陽が海から昇って海の中に沈んでいくのを見て、火は水から生じるものと思ったのだろう。厳しい自然環境のもとで火の保持は生命の維持のために不可欠なものとなり、ひいては生命の源となったと思われる。こうした背景から、次第に火が神格化していったことは自然な成り行きといえよう。『マヌの法典 (*Manusmriti* : 以下MSと記す)』には、人が死ぬとその人の火で火葬し、以来その火は灯さないと記されている (MS : V-167, 168)。

「正しく火中に投げられた供物は太陽に達し、太陽より雨生じ、雨より食物（生じ）、これより生物（生じ）(MS : III-76 ; 田辺1983)」という一連の因果関係において、供物を太陽まで運ぶのもアグニである。アグニはそれ自身神でありながら、人間の供物の伝達者の役割を果たしていることがわかる。このように浄きものの火は浄めの手段として用いられ、

- また放尿や不浄なもので汚してはならない（灰も同様）とされる。
- ③ソーマ (*Soma*) : 同名の植物に水と牛乳などを混ぜて作られた興奮性の飲料水（祭式で諸神に捧げられた）の神格で、酒神である。月神でもある。
- ④ルドラ (*Rudra*) : 破壊、病苦、懲罰の神で、もっとも恐れるべき神の一人である一方、雨をもたらし、豊穰と人々の健康と安寧を保証する。パシュパティ（家畜の王）、マハーデーヴァ（大神）など12の異名をもつ。『リグ・ヴェーダ』以来その性格に変化はないが、叙事詩時代以降はもっぱらシヴァの名で呼ばれるようになった。
- ⑤アシュヴィン (*Asvin*) : 暁、厄難救済の双神で、ロバの引く乗り物に乗る。スラー酒と蜜を好み、その密鞭を用いて祭式と祭司を潤す。
- ⑥マルト (*Marut*) : モンスーンによってもたらされる暴風、豪雨、電光の神で、脅威破壊と万物生育の恵みの両面をもつ。
- ⑦サーヴィトリー (*Savitri*) : 金色金光を特徴とする太陽神である。黄金の両手をさしのべ、光線で全宇宙を照らすとされる。別の太陽神のスーリヤと同一視される場合もある。
- ⑧プラジャーパティ (*Prajapati*) : 造物主を意味するこの神は、最初はソーマやサーヴィトリーの称号として用いられたが、後に独立し、子孫・家畜の増殖・保護の神となり、ブラーフmana時代には最高神の位置についた。亀や野猪の形をとり、両性具有者ともされる。
- ⑨ニルリティ (*Nirriti*) : 死と災難の女神で非法と暴力の娘、疾病・死の母である。南方を支配する。
- ⑩ヴァルナ (*Varuna*) : 性格について定説がなく蒼空神、月神、水神、司法神などと呼ばれるが、司法神としての威厳が顕著である。叙事詩時代には主に水神となる。ルドラとともにヴェーダ・パンテオンではもっとも恐れるべき神で、一度その縄で縛られると水腫病にかかって死ぬとされる。形相の特徴は白色、禿頭、出歯、黄眼である。
- ⑪ヴィシュヴェデーヴァ (*Visvedevah*) : 全パンテオンを総括する一切神である。
- ⑫ヴィシュヌ (*Visnu*) : シヴァ神と並んでヒンドゥー教の最高神であるが、『リグ・ヴェーダ』においては重要な神ではなく、太陽の輝きを神格化したものにすぎなかった。ブラーフmana時代に至ってようやく頭角を現し、叙事詩・プラーナの時代には神話の中心となり、熱烈な信仰の対象となった。
- ⑬アヌマティ (*Anumati*) : 満月の女神である。
- ⑭シーター (*Sita*) : ヴェーダには農業と実りの女神として描かれており、後の叙事詩・プラーナ文献ではラーマの妻、ラクシュミー（ヴィシュヌの妻）の化身ともいわれる。
- ⑮このほかに、ミトラ（太陽神）、クラ（新月の女神）、バドラカーリー（不幸の女神）、ヴァーストーシュパティ（家の守護神）、ダヌヴァンタリ（日の出の神）、プラーマン（梵天）、ヤマ（死界の王）、ヴァータ（風神）、ブリハस्पティ（神々の神）がみられる。
- GSの神々はすでに『リグ＝ヴェーダ』にみられるような、自然現象を神格化したものがもっとも多く、これはバラモン教の神性の特徴でもある。プラーマン、ヴィシュヌ、シヴァの最高神が現れる前はインドラが最高位を占めていた。上記のもの以外にも『リグ＝ヴェーダ』には多数の神々が登場しており、GSに取りあげられていないからといってその神が消滅してしまったとはいえないだろう。『リグ＝ヴェーダ』では独立讃歌がインドラ、アグニ、ソーマ、アシュヴィンの順に多くなっている。人気が高かったであろうソーマやアシュヴィンは、次節でみるように、GSでのその登場

回数は激減している。こうした事例は、バラモン教の神々の興亡の一面を垣間見せているのかも知れない。

#### IV. GSにおける儀礼と供物

##### (1) GSの家庭儀礼の概要

GSの家庭儀礼は、

- ①人生儀礼、
- ②家長夫妻による日々の供養、
- ③定期的に行う儀礼、
- ④必要に応じて行う臨時の儀礼・浄法・呪法、
- ⑤願掛けの儀礼、

の5つに大別することができる。再生族の人生儀礼には受胎式、男児誕生を願う祈願式、妊婦の分髪式 誕生式、命名式、子供の外出式、食初め式、耳あけ式、剃髪式、ヴェーダ学習への入学式、入門式（宗教上の再生を果たす儀式）、学習後の帰家式、結婚式、葬送儀礼、祖霊祭などがある。

家長夫妻による日々の供養とは、所帯をもった家長が正妻と共に毎日行うべき五大供養 (*panca yajnas*) のことである。すなわち、ヴェーダの学習による梵の供養 (*ahuta*)、火中への献供による神々の供養 (*huta*)、タルパナ（水と食物の供物）による祖霊の供養 (*prasita*)、バリ供養（鬼霊や生類に食物を献げる）によるブータ（生類または悪鬼）の供養 (*prahuta*)、客の饗応による人間の供養 (*brahmani huta*) の5つである。

定期的に行われる儀礼には新月祭、満月祭、播種祭、収穫祭、エーカーシュタカー (*Ekastka*：満月後の8日目の儀礼)、アシユタカー祭 (*Astka*：露季と冬季の月の満月後の8日目に行われる祖霊祭)、アンヴァシュタキャー祭 (*Anvastkya*：冬季の3ヶ月の間、満月後の9日目に行われる祖霊祭)、蛇供養（夏季）などがある。

家を建てたり、水瓶をおいたり、庭をきれいにする時、また夢見が悪い時などには臨時の儀礼や浄法が必要とされる。

家畜の繁殖、よい夫婦仲、幸せな生活を望む時には決まった願掛け儀礼が行われる。しかし、その具体的なやり方については述べられていない。

GSの内容はテーマ別になっており、婚姻儀礼から妊娠、出産、教育の順になっているのがもっとも多いが、入門式からはじまるものもある。あるいはそのどちらでもないものもある。

本章では上記の諸儀礼を資料とし、

- ①特定の儀礼・呪法・浄法が特定の超自然的存在と結びついているかどうか、
- ②特定の儀礼・呪法・浄法・超自然的存在が特定の供物と結びついているかどうか、
- ③超自然的存在の間のヒエラルキーが供物に反映されているかどうか、
- ④食物に浄・不浄や吉・凶の観念がみられるかどうか

についてみていきたい。

##### (2) 超自然的存在と諸儀礼

GSに記載された諸儀礼の献供対象である神々の名を整理すると次のようである。

- ・満月祭：インドラ、アグニ、ルドラ、アシュヴィン、マルト、プラジャーパティ、ヴィシュヴェデーヴァ、ヴィシュヌ
- ・新月祭：アグニ
- ・播種祭：アヌマティ、マルト
- ・初穂祭：インドラ、アグニ
- ・アダヤーヨーパーカラナ (*Adhyayopakarana*：一年コースのヴェーダ学習を始めるための儀式)：サーヴィトリー、アヌマティ
- ・帰家式：サーヴィトリー
- ・結婚式：インドラ、アグニ、マルト、プラジャーパティ、ヴァルナ、ソーマ
- ・妊婦の分髪式：プラジャーパティ
- ・アグニアーデーヤ (*Agniadheya*：三聖火の安置式)：プラジャーパテ

イ、アヌマティ

- ・アシュタカー祭（祖霊祭）：インドラ、プラジャーパティ、ヴィシュヴェデーヴァ
- ・シューラガヴァ供犠（*Sulagava*：ルドラのための牝牛の供犠）：ルドラ、アグニ
- ・鋤に引き具を取り付ける時：インドラ、アシュヴィン、アヌマティ、マールト
- ・寄付があった時：ルドラ
- ・浄法：インドラ、アグニ、ニルリティ

これらのもの以外にも献供対象の固有名は示されず、ただ「供える」、あるいは「神々」、「火」、「地面」に供えるというふうに記されている箇所も多数ある。上記でみるように、ほとんどの儀礼・浄法において複数の神に供物が供えられていることがわかる。もっとも多い順からみると、インドラ（6回）、アグニ（6回）、プラジャーパティ（5回）、マールト（4回）、アヌマティ（4回）、ルドラ（3回）、アシュヴィン（2回）、サーヴィトリー（2回）、ヴシュヴェデーヴァ（2回）、ヴィシュヌ（1回）、ヴァルナ（1回）、ソーマ（1回）、ニルリティ（1回）となっている。

儀礼・呪法の性格と献供対象の神々の属性は符合しているのだろうか。その可能性があるのはシューラガヴァ供犠（ルドラ）、結婚式（プラジャーパティ、アグニ）、播種祭と鋤の引き具の取り付け式（マールト、アヌマティ）くらいである。GSにはルドラに対する畏怖の念がしばしば述べられており、シューラガヴァはこの恐るべき神を慰撫するための牝牛の供犠である。この供犠は村の境界線の外で行わなければならないとされ、ここにルドラに対する恐怖がよく表れている。また、家畜が病気にかからないように牛小屋で「家畜の王」のルドラに牝牛が献げられることもある。このような供犠の目的はいずれもルドラの性格と一致し

たものである。

結婚式においてアグニとプラジャーパティに供物を供えるのは、それぞれ新しい聖火の安置（所帯を持ち家長になることを意味）と子孫（と家畜）の繁栄が関係しているのであろう。

妊娠した妻の髪を分けることは妻の新しいステータスへの移行を意味し、この儀礼で造物主であり、子孫の繁栄を司るプラジャーパティをまつのは理解できる。様々な浄法において淨いものとされるアグニが献供の対象になっているのも当然のことであろう。

最後に、豪雨・風（マールト）と月（アヌマティ）の神々が、播種祭と鋤の引き具の取り付け式など、農業関係のものと密接に係わっているのは不思議ではない。

以上で述べた例以外は、儀礼・浄法・呪法とそこで祀られる神々との性格が符合しているとは考えにくい。インドラ、アグニ、プラジャーパティの三神が全体の献供対象の45%を占めているが、これはおそらくこれらの神々が当時もっとも威力をもつものとされ、人気を集めていたことに起因するのであろう。GS時代より後の『マヌの法典』時代（紀元前200年～紀元後200年）にも、GSには登場しないいくつかの神々が新たに現れるが、複数の有力な神々に献供が集中している点は同様である。しかし、後述するように、各儀礼において名が記されていない神々にも実際に供物が供えられた可能性も排除できない。それでは供物の種類は、献供の対象の超自然的存在の属性となんらかの関係があるのかどうかについて次節でみることにしよう。

### （3）超自然的存在と供物

ここではまず特定の儀礼に決まった供物が用いられるかどうかについてみてみよう。GSにおける諸儀礼に用いられる供物を整理すると次のようである<sup>(4)</sup>。（ ）内のb、c、fはそれぞれ「b:boiled, c:cooked,

f: fried」の略で、「+」は混合を意味する。

①米

- ・単品：日々の供養、アンヴァシュタキヤ祭、帰家式、シーター供養、死者儀礼、鋤の引き具の取り付け式、家畜の繁殖・生計手段の確保を願う時（落穂）、病気回復、様々な願掛け
- ・+牛乳(b)：新・満月祭、アーシュヴァユジャ (Asvayuja：9-10月) 満月祭（牛乳のほかにギー、蜜、凝乳を一緒に入れる場合もある）、アシュタカー祭、アンヴァシュタキヤ祭、初穂祭、アグラハーヤナ (Agrahayana：11-12月) 満月祭、家の新築と修理（肉、動物の脂肪、ギーにすることもある）、動物供犠、夢見が悪いとき、悪いことが起きた時、真夜中に鳥が鳴く時、バリ供養、病気回復と金持ちを願う時
- ・+胡麻(b)：アシュタカー祭、アンヴァシュタキヤ祭
- ・+ギー(b)：アシュタカー祭、新・満月祭、入門式、日々の供養

②米の粃殻とご飯の浮きかす

- ・単品：布施を行った時、誕生儀礼（粃殻）、新・満月祭（浮きかす）

③大麦

- ・単品：バリ供養、シーター供養、ヴェーダ学習期間中の儀礼
- ・単品(f)：満月祭
- ・+牛乳(c)：池、井戸・水瓶の浄化
- ・+バター(f)：新・満月祭
- ・+凝乳(f)：入門式
- ・+ギー(c)：新・満月祭

④穀物<sup>(5)</sup>

- ・単品(b)：アシュタカー祭、病気回復、特別な願掛け
- ・単品(f)：満月祭、日々の供養、家畜の繁殖や金持ちを願う時、鋤

の引き具の取り付け式、結婚式（サニ葉入り）

- ・+凝乳：アダヤーヨーパーカラナ
- ・+ギー(f)：満月祭、論争に勝つことを願う時

⑤胡麻

- ・単品：日々の供養、新・満月祭（胡麻油）、アダヤーヨーパーカラナ
- ・+ムドガ豆(ケツルアズキ)(c)：妊婦の分髪式、鳥獣の繁殖、アンヴァシュタキヤ祭、アダヤーヨーパーカラナ、日々の供養
- ・+ギー：夢見が悪い時

⑥牛乳

- ・単品：新・満月祭、池・井戸・水瓶の浄化

⑦凝乳

- ・単品：新・満月祭、アンヴァシュタキヤ祭、アシュタカー祭、日々の供養、鋤の引き具の取り付け式
- ・+バター：アーシュヴァユジャ満月祭
- ・+ギー：牝牛の出産の時、家畜の増殖

⑧バター

- ・単品：家庭の祭式（ギーでもよい）、特別な願望（たとえば12の村を手に入れたい時）

⑨ギー<sup>(6)</sup>

- ・単品：新・満月祭、初穂祭、入門式（ギーを塗ったパラの葉）、アシュタカー祭、アダヤーヨーパーカラナ祭、シュラーダ (Suraddha：祖霊祭)、バリ供養、動物供犠、特別な願望（たとえば逃走しようとする下男をとめておくときにギーを塗ったクシャの葉）、結婚式後三日目
- ・+牛乳ライス：アーシュヴァユジャ満月祭、新・満月祭、シューラガヴァ供犠
- ・+炒り大麦・穀物の粉・凝乳：ウパーカラナ
- ・+脂肪：家の新築と修理

## ⑩肉類

- ・単品：アシュタカー祭（牝牛の大網の部分）、アンヴァシュタキャ祭（牝牛の左股肉）、アンヴァーハーリヤ祭（*Anvaharya*：毎月の祖霊祭）、シューラガヴァ供犠、家の新築（黒牛または白山羊＋その脂肪＋ギー＋牛乳ライス）、浄法（ロバ）

## ⑪油と脂肪

- ・単品：新・満月祭（胡麻油）、シュラウツダ、動物供犠（脂肪）
- ・＋ギー：家の新築（脂肪）

## ⑫蜜

- ・＋パンガユ：アンヴァシュタキャ祭

## ⑬野菜

- ・単品：アシュタカー祭、シュラウツダ祭

以上は諸儀礼・呪法・浄法から供物の部分のみを整理したものであるが、供物のほかに食物を「食す」、「触る」、「撒く」、「塗る」などのやり方も多く見られる。様々な食材が使われ、2種類以上の混合物が目立つ。中でも穀物類と乳製品が重要な位置を占めており、ほとんどの場合に用いられている。乳製品（牛乳・凝乳・ギー・バター）はそれ自体高い浄性をもつとされ、祭事・儀礼には欠かせないものである。ミルク・ライス（*sthalipaka*）は当時もっとも一般的な供物らしく、多くの儀礼に用いられている。

「儀礼／呪法・浄法」、また「供物／他の用法」というふうに、必ずしも用途別に「食物」の使い分けがなされているようにはみえない。さらに胡麻と肉類の例を除き、特定の供物が特定の儀礼と結びついているとも考えにくい。胡麻は古代インドで愛用されたものの一つで、食用のほかに塗油、布施、鳥の殺害に対する補償物にも使われた。GSでは胡麻は一つの房からたくさんの粒が得られることから繁栄・繁殖と結びついており、妊婦の分髪式において供えた

り妊婦が食べたりする。アダヤーヨーパークアナでヴェーダの師が、獲得したい学生の数だけの胡麻粒を供えるのも同様の類感呪術である。肉類は部位別に供物の種類が分かれており、その理由は明らかにされていないが、ほとんどが祖霊祭と関係している。肉類については次節で述べたい。

つぎに、各超自然的存在には特定の供物が献げられているかどうかについてみよう。紙面の関係上、ここで神々と供物の関係を再び整理して提示せず、上記の資料を用いながら考察したい。一つの儀礼において複数の神々がまつられ、またほかの儀礼の場合と共通した様々な供物が供えられていることから、基本的に特定の供物が特定の神と結びついているとは考えにくい。上記の動物供犠を伴う儀礼のうち、神々の固有名があげられているのはインドラ（アシュタカー祭：牝牛）、ルドラ（シューラガヴァ供犠：牝牛）、プラジャーパティ（アシュタカー祭：牝牛）、ニルリティ（新月の日に純潔の誓いを破った学生の浄法：ロバ）、ヴィシュヴェデーヴァ（アシュタカー祭：牝牛）の5つである。残りの3例は献供対象が特に記されていないことから、上記の神々のみに肉類の供物が好んで献げられていたとは考えにくい。

以上の考察からGS時代には、特定の儀礼・呪法が特定の神々と結ぶついておらず、また神々にはその性格等と符合する決まった供物が供えられたわけではないようである。ただし、祖霊祭の例にみるように、特定の儀礼と特定の供物が結びついていることもある。それでは供物はどのような基準によって選ばれたのだろうか。これについては次節で考えたい。

## (4) 供物と浄・不浄／吉・凶

GSにみられる供物はほとんどが日常的な食物である。しかし、供物として用いられた食物が当時の人々が食べていた日常食のすべてではないはずである。アーリヤ人

はインドに入ってきた初期のころは主に牧畜業を営んでいたが、その後、ガンジス中・下流域まで進みGS時代になると農耕が優位な生業形態となった。農作物はヴェーダ時代には主に大麦を栽培したが、GSの供物には米のほうがより重要な位置を占めている。乳製品はほとんどの供物に取り入れられており、供える前には必ずギーで浄めているのをみると、供物において浄・不浄が重要な要素となっていることがわかる。牧畜民のアーリヤ人にとって牛乳をはじめ乳製品は欠かせない食材であり、生業が農業に取って代わられた後も農産物とともに供物の主役となっているのである。

蜂蜜は幸運をもたらす吉なるものとされ、マドゥパルカ (*madhuparka* : 蜂蜜+ギー+凝乳または蜂蜜+ギー+凝乳+水+穀物の食物) という蜂蜜の混合物は最高の飲み物として「罪滅ぼし」のための動物供犠の際には必ず賓客 (師、王、司祭、義父、友人など) に出された。

GS時代の肉類は、動物供犠が盛んであったヴェーダ時代ほどではないが、まだ日常食や供物として多く用いられていたようである。供物の肉のほとんどが牝牛であるところにヴェーダ時代との連続性がみられる。次のMS時代になると、儀礼から牝牛の供犠は消えたものの、まだ他の肉類の供物は残存している。不殺生を謳える仏教やジャイナ教の成立後も長い間、原始ヒンドゥー教では肉食生活が続いていたことがわかる。

以上のことから、GSの供物は米や大麦など日常食の穀物と、乳製品をはじめ浄で吉なるものを中心に供えられていたといえる。今日のヒンドゥー教にみられる、食物に対する浄・不浄や吉・凶の観念がすでにGS時代にも存在したのである。

当時肉類は、供物として頻繁に用いられることはないが、不浄視されてもいなかったようである。

次に、供物を通してみた超自然的存在間

のヒエラルキーについてみてみよう。

#### (5) バラモン教のパンテオンにおけるヒエラルキーと供物

ヒンドゥー教では一般的にサンスクリットの神々とローカル神には異なる供物が与えられ (前者は菜食、後者は動物供犠による肉類や酒)、両者の間に上下関係が認められている。また様々な鬼霊にもサンスクリット神とは違う食物が供えられる。インドラやアグニなど特に威力をもつものがいたにもかかわらず、GSの神々の供物は互いに共通しているものが多く、まだ供物が神々の序列を示す手段になっていなかったといえよう。それでは神々とほかの超自然的存在との関係はどうなのだろうか。GSには先に述べた神々以外の超自然的存在として祖霊がもっとも重要な位置を占めているので、ここではMSにみられる超自然的存在を一緒にみていきたい。MSには前記の神々のほかに、アスラ (*Asura* : 阿修羅)、ダーナヴァ (*Danava* : 悪神)、ヤクシャ (*Yaksa* : 夜叉)、ラクシャサ (*Rak-sasa* : 羅刹)、ピシャーチャ (*Pisacha* : 化け物)、ブータ (*Bhuta* : 悪霊)、ピトリ (*Pitri* : 祖霊)、プレータ (*Preta* : 亡霊) の存在があるが、それぞれについての詳細な言及はない。バラモン教の神話では一般的に、アシュラとダーナヴァは善神の敵とみなされ、ヤクシャ、ラクシャサ、ピシャーチャ、ブータ、プレータ等は危害を加える悪霊で神々の下にランク付けされている。しかし、これらは邪悪な性格のみではなく、多産と豊饒を司るなど人々に祝福をもたらす属性をも合わせ持っているのである。

ヤクシャ、ラクシャサ、ピシャーチャの食物は肉や、スラー酒・スラーサヴァ酒をはじめすべての酒類となっている。スラー酒は糖蜜と陸稻などで作る強い酒で、当時の人々が好んで飲んでいたらしく、その弊害については他の文献にも述べられてい

る。祖霊祭（アシュタカー祭やアンヴァシユタキャ祭）では、三代の祖先の妻たち（母、祖母、曾祖母）にラム酒またはほかの酒を供えている。ここでは祖霊と上記三者との間に供物の違いはみられない。一方、肉食は後にネガティブに捉えられ、サンスクリットの神々をローカル神や悪鬼から分ける基準の一つになったが、ブラーフマナ文献時代には神、祖霊、悪鬼の共通の食習慣であった。神々への祭式を重要視すると同時に、祖先供養やバリ供養を行うことは再生族の家長に科せられた義務であった。祖先供養には毎日行うもの（*Pitri medha* / *Pitri yajna*：水と日々の食物をを供える）と、定期的行う祖霊祭（各種の供物）がある。祖霊祭は毎月（新月の日または満月の10日以降）、アシュタカー日（露季と冬季の月の満月後の8日目）、アンヴァシユタキャ日（11月～2月の満月後の9日目）に行われるとされる。祖霊に献げる供物はピンダ（*pinda*：祭餅）を除き、ほとんどが神々への供物と同種である。また祖霊祭では祖霊だけでなく、神々も献供の対象になり、祖霊よりも先に供物が献げられた。ピンダ自体は祖霊の食べ物とされるが、男児誕生を願う家長の正妻は中央のピンダ（祖父のもの）を食す（*Gobhila* GS：III-27, MS：III-262）となっていることや、客にも出されていたことなど、ピンダを食した人間の食べ物として扱わない現在とは非常に対照的である。祖霊は極めて熱い食物を食す（MS：III-236, 237）とされ、はじめて供物の受け手の好み記されている。供物以外の点では、祖霊には「南面して」供えたり（MS：III-215）、（客）が南面して食す食物は羅刹が（かかるものを）食す（MS：III-238）という句から、南の方角は死の地、祖先の地であることがわかる。主にインド北部を中心に拡大していったアーリヤ人にとって、先住民族の多く住む南は未知の地でありその故、凶なる地であったことは多くのサンスクリット文

献が伝えている。その南の方角が祖霊や羅刹と結びついているとしたら、たとえ供物における違いはみられなくても、神々とは区別されていたといえるだろう。

家長は毎日食事の前に、まず神々に食物の一部を献げ、つづいて様々な鬼霊にも供える。その際には、同じものを火や水の中または空中に投げるか、地面に置くという同一のやり方で供える。ラクシャサに先に供えて、その残り物を祖霊に供えると記されており、両者の序列が必ずしも明らかではない。

以上の考察から、善神、悪神、鬼霊の性格はある程度区別されていたように思われるが、これらの間のヒエラルキーが供物には明確に反映されていない。

## V. おわりに

ヒンドゥー教の神話は神々にまつわる様々なエピソードを伝えている。これらには一般に神の性格や特徴が語られており、時にはライフヒストリーまで盛り込まれている。このような神々には自らの好物とされるものや、その性格と符合したものが供物として供えられることが多い。ヒンドゥー教は、インドの西北部に移動してきたアーリヤ人のバラモン教が土着の文化との習合を繰り返した結果、今日のような形態をもつようになったことは周知の通りである。本稿では、バラモン教において供物はどのような形をみせ、またそれを通して当時の超自然的存在がどのように認識されているのかについて考察した。再生族のための文献を通してみることは資料的制約があるが、ヒンドゥー教の初期の形態を垣間見ることはできるのではないだろうか。

バラモン教においては人生儀礼、農耕儀礼、様々な願掛けの際に、複数の神々に複数の食物を供えて祀る。しかし、シューラガヴァ供犠（ルドラ）、結婚式（プラジャーパティとアグニ）、播種祭と鋤の引き具

の取り付け式（マールトとアヌマティ）にみるように、儀礼の性格と献供対象の神々の属性が符合している例もある。

神々の中には、インドラ、アグニ、ブラジャーパティなどの有力なものが存在しているが、これらの間に供物における違いはみられず、またそれぞれの供物もほとんどの場合、その神性とは結びついていないといえよう。また、サンスクリット神と、祖霊（ピトリ）・鬼霊は供物による区別がなされておらず、この三者にはほとんどの場合同一の食物が同様のやり方で献げられる。ただし、祖霊の住処は南とされ供物も南に向かって供える点や、南面して食べると羅刹に食べ物を盗られるということから、これらが独自の性格をもつものと認識されていたと考えられる。しかし、異なる属性をもつそれぞれの超自然的存在の間のヒエラルキーは、GSとMSの供物の考察からは確認することができなかった。

バラモン教時代の神々は、それぞれ個性をもって得意とする領域を有しており、中には最高神と称されるものもいた。しかし、人々は供物を通して神々の性格や威力を表現し、さらにその神の好物を献げることによってより効力を高めようとする段階には至っていなかったといえよう。GSとMSはその成立時代から後期バラモン教（原始ヒンドゥー教）の資料であり、後の叙事詩時代やプラーナ時代の文献は超自然的存在と供物の関係についてさらなる変容をみせているのかも知れない。

注

- 1) タミル・ナードゥ州、アーンドラ・プラデーシュ州、カルナータカ州のパーヤサムは、牛乳で作った液体であるのに対し、ケーララ州では牛乳の入っていない固体もある。これは様々な味付け米料理に代わるケーララの典型的な供物である (Ferro-Luzzi 1977 a : 536-7)。
- 2) Oldenberg, H. (translation) 1886
- 3) シクシャー (音声学)、カルパ・スートラ (祭事経)、ヴィアーカラナ (文法学)、ニルクタ (語源学)、チャンダス (音韻学)、ジオーティス (天文学) (辻直四郎1975: 4)
- 4) 材料の名前や調理法などはサンスクリットの英訳をそのまま用いた。調理法の「cooked」はどのように料理したものなのかは不明だが、「boiled」を排除しないものと思われる。
- 5) 穀物の種類は不明だが、米や大麦も含むものと思われる。
- 6) 供物のギーは *ajya* といわれる。

資料

Oldenberg, H.(translation): *The Grihya Sutras-Rules of Vedic Domestic Ceremonies, Sacred Books of the East*, vol.29, 30, Muller, F. Max.(ed.), Oxford, London, 1886

参考文献

- Buhler, G.(translation): *Sacred Laws of Aryas, Sacred Books of the East*, vol.2, 4, Muller, F. Max.(ed.), Oxford, London, 1886
- Buhler, G.(translation): *The Law of Manu, Sacred Books of the East*, vol. 25, Oxford, London, 1886
- Dumont, L.: *Homo Hierarchicus-The Caste System and Its Implications*, The univ. of Chicago, 1980 (1966)
- デュルケーム, E.,吉野清人訳:『宗教生活の原初形態』、岩波書店、1977
- Ferro-Luzzi, G. E.: "The Logic of South Indian Food Offerings", *Anthropos* 72, 529-556, 1977a
- Ferro-Luzzi, G. E.: "Ritual as Language-The Case of South Indian Food Offerings", *Current Anthropology* 18, 507-514, 1977b
- Gonda, J.: *The Ritual Sutras, A History of Indian Literature I-2*, Otto Harrasswit・Wiesbaden, 1977
- Kautiliya, 上村勝彦訳:『実利論』上・下、岩波文庫、1984

- 中村元：『ヒンドゥー教史』、世界宗教史叢書 6、山川出版社、1979
- O'Flaherty, W. D.: *Sexual Metaphors and Animal Symbol in Indian Mythology*, The Univ. of Chicago, 1980
- Staal, F.: *Agni, The Vedic Ritual of the Five Altar*, vol. 1, Delhi, 1983
- 立川武蔵：『ヒンドゥーの神々』、せりか書房、1980
- 田辺繁子：『マヌの法典』、岩波文庫、1983 (1953)
- 田森雅一：「星神と母神の宇宙に生まれて—ヒンドゥーの命名儀礼」『季刊民族学』82、1997、98—103
- 辻直四郎：『リグ=ヴェーダ』、岩波文庫、1971
- 辻直四郎：『インド文明の曙』、岩波新書、1975 (1967)
- 辻直四郎：『アタルヴァ=ヴェーダ』、岩波文庫、1979
- 辻直四郎：『辻直四郎著作集』1—4、法蔵館、1981

*ABSTRACT*

## The Brahmanical Pantheon as Viewed Through Food Offerings

Kisook KIM

Hindu mythologies tell of the character and favorite foods of the various gods. In Hinduism today, when offerings are made to the gods, there is a tendency to select foods which correspond to the respective nature of each god, as recounted in the mythology.

In this paper, I have tried to explore the Brahmanical pantheon as conceived through the offering of food in the Grihya-Sutras (ritual books for twice-born people in the period 600 B.C.-200 B.C.).

In Brahmanism, many gods are worshipped simultaneously by offering different kinds of food on the occasions of rites of passage, agricultural rites, and the time of offering prayers to a god (Nihongo-gankake). Among these occasions, the character of rites such as the Shuragava sacrifice, wedding ceremony and sowing rite correspond to the nature of the specific gods. There are powerful and popular gods, such as Indra, Agni, and Prajapati; however, there is no difference in the type of food offerings presented to them, and in most cases the gods' individual characters as depicted through the mythology are not reflected in these offerings. Unlike in present Hinduism, the Sanskrit gods, Pitri (ancestral spirit) and other evil spirits are also not differentiated in the food offerings. As far as food offerings are concerned, it is difficult to ascertain that there is an obvious hierarchy in the Brahmanical pantheon.

Brahmanical gods possess their own character and power just as do the present Hindu gods. But it is likely that people in the Brahmanical period were not concerned with reflecting the nature and power of the gods in their food offerings, nor did they try to heighten the availability of the gods by offering them their favorite foods.

Both the Grihya-Sutras and the Manu-Smriti are Sanskrit literature of the later Brahmanical period. We may see the continuity and change in the relationship between the supernatural and food offerings through a further exploration of the literature of later times.